

資本主義リアリズム

著：マーク・フィッシャー

約：セバスチャン・ブロイ　河南瑠莉

全体の内容

筆者は、資本主義のもつ問題点を明らかにしている。そのうえで、資本主義リアリズムを受け入れてしまう、あくまで諦めの姿勢が蔓延っている世の中に対し、自身を防衛していきながら、それに抗う必要があると主張している

第一章　資本主義の終わりより、世界の終わりを想像する方がたやすい

「資本主義リベラリズム」：資本主義が唯一の存続可能な政治・経済的精度のみならず、今やそれに対する論理一貫した代替物を想像することすら不可能だ、という認識が蔓延した状態

「トゥモロー・ワールド」：次世代がいなくなることで、文化遺産が意味を持たなくなっている未来を映している

「若者たちが驚きを生み出せなくなったとき、その先には一体何があるのか」未来を消耗してしまえば、私たちには過去すら残されない

資本主義リベラリズムの内では、文化的実践や儀礼が単なる美学的なオブジェに変容されることによって、文化の信仰するものは、客観的に皮肉られながらアーティファクトと化する

→資本主義とは、様々な信仰が儀式的・象徴的な次元において崩壊した後に残るものであり、消費者＝鑑賞者しかいない。一方で、信仰から美学へ、そして参与から鑑賞への転換は、資本主義リアリズムの美徳の一つとされている。すなわち、原理主義の誘惑に対する免疫力をつけてくれる盾として働く

デュルーズ・ガタリ、フランシスフクヤマ：資本主義の中では、新しいものは生まれてこない「歴史のおわり」⇄

フレドリック・ジェイソン：「ポストモダニズム」

資本主義リアリズムという言葉を用いる理由として、以下の3つがある。

・とても深刻で、蔓延した無力感と文化・政治的な不毛さ「この道しかない」

・資本主義リアリズムは、モダニズムとの対立関係を示さず、モダニズムの敗北が当然であるとする

・資本主義文化によって欲望、期待、希望の先制的なフォーマット化に直面している

第二章　もし君の抗議活動にみなが賛同したとしたら？

資本主義リアリズムにおいては、冷酷で略奪的な形態と極度に同一化する形で、表れる必要があるのではなく、反・資本主義は予め除外されるわけではない。反・資本主義が存在することが、むしろ資本主義リアリズムを補強してしまう。

→なぜ？：反・資本主義が存在することによって、その他の人々は罪悪感に悩むことなく消費し続けることを許される。資本主義は代弁者がいなくても、問題なく、より円滑に機能し続けられる。

ジジェク：資本主義は関与否認の構造によって支えられている。お金を、無意味な代用品であると信じていながらも、それが聖なる価値を持つかのようにふるまっている。

9 1 1 以来、「反・資本主義運動」、「パンクロック的」「ヒップホップ的」精神：資本主義以外の道はないという「現実主義」の了解を認めてしまっている。結果として、資本主義を脱することが目的ではなく、最もひどい状態の緩和が目的になってしまっていた。

→筆者は、真の政治的主体性を取り戻すのは、まず、私たちの政治への関与のあり方を認めさせることから始まると主張している。

” 資本主義が超抽象的かつ非人称的な構造であること”、” 私たちの協力をなくしては、資本主義も皆無になること” の2つを心に止めることが大事

第三章　資本主義とリアル

資本主義リアリズムを揺るがすことができる唯一の方法は、それを一種の矛盾をはらむ擁護不可能なものとして示すことである

そのために、筆者は2つのアボリア（問題）を引き合いに出している。

「精神保健」：資本主義社会の中で増加するストレスの問題は、決して自己責任なのではなく多くの若い人が病気であるという状態を受け入れてしまっている資本主義の本質的な機能不全性

「官僚主義」：スターリン時代の遺物だと思われる官僚主義は、形式を変えながら、お役所的な形式主義として、日常生活の一部であり続けている。結果、計画経済の制度のなかで、硬直化と効率の低下をもたらしているように、資本主義が実際に動く仕組みは、資本主義リアリズムが提示するイメージとはかなり異なっている。

第四章　再帰的無能感、現状維持、そしてリベラル共産主義

今日のイギリスの学生は政治的に無関心だという印象がある→再帰的無能感の問題である。事態がよくないと分かっているが、事態に対してなす術がないということのを了承してしまっている

学生たち：規律制度の対象者であるという従来のな役割と、サービスの消費者という新しい地位との間で板挟み状態に陥っている。

→快楽を求める以外何もできなくなっている ...SNS、ファストフード ...

デュルーズ：閉鎖的空間を中心に組織化されてきた規律社会と、全ての制度が分散型組織のなかへ埋め込まれる新しい管理会社とを区別して論じている「管理会社」：無期限の延期に基づいて機能する

現代では、制御に依存しつつ、他方ではまた必然的に、管理に乗っ取られ、管理に憑りつかれている。例えば、生涯のプロセスとしての教育、いつまでも続く労働生活、、、

監獄的な規律体制は管理のテクノロジーと、その絶え間ない消費とたゆみない開発のシステムによって浸食されていく。結果、学業を「つまらない」と感じ、学生は快楽的なだるさに浸ることで、自由に応じていく。つまり、感性的刺激の母胎に埋め込まれた状態から離脱させられる。

娯楽の母胎に接続され続けることは結果として、落ち着きのない、神経過敏な状態をもたらす。

一方、教員はポスト識字的な主体性と、規律制度の狭間に立たされている。これは、教育の現場が資本主義社会の矛盾に直面しつつ、その社会的現実を再生産するエンジンルームであることを示している。

「現状維持」抗議者：資本主義に抵抗できても超越はできないという暗黙の妥協

「リベラル共産主義者」：資本主義におけるモラルなき非道は慈善活動によって埋め合わせるべきだ

→資本主義リアリズムが現代の政治的可能性の範囲を限定している

私たちは、これから動機付けと動機喪失の二項対立からの抜け道を発見しなければならない。そうすれば、管理プログラムとの同化を拒否することが、落胆したアバシーとは異なる形で表出できるだろう

→給与を巡る労働組合の伝統的関心から、ポスト・フォーディズム特有の不満の形へ焦点を移動することは一つの戦略になると筆者は考える。

第五章　一九七九年一〇月六日

フォーディズム（現状維持）→ポスト・フィーディズム

1979 年 10 月 6 日 「サプライサイド経済学」への道を開いた

労働力をパートタイムの雇用形態に切り替える「柔軟性」へ移り変わった

結果、労働と生活は不可分なものになり、生産と分配が再編成されながら、人間の脳神経もまた再編成された。

ポスト・フォーディズムにおいて精神と情動の障害という「見えざる疫病」はより深刻になっている。

支配的な存在論では、精神障害を個人の化学的・生物学的問題とみなすことで、資本主義は莫大な利点を得ている

- 個人を孤立化させようとする資本の傾向を強化させる
- 薬剤売買の利益性の高い市場を提供する

第六章　形あるものみな広報へと消えゆく　一市場型スターリニズムとお役所型反生産

上からの意思決定や中央集権的な管理の終焉を告げる新自由主義的なレトリックが顕著になったにも関わらず、「目的と目標」「結果主義」「ミッション・ステートメント」を巡る新しいタイプの官僚主義（市場型スターリズム）が浸透してきている。

「市場型スターリズム」：例：地方自治体が提供するサービスの向上よりも、それらのサービスがきちんと表象されていることの保証により多くの労力が費やされるといった優先順位の逆転

そこから、後に生まれた後期資本主義においても、実際の成功よりも、成功の象徴に価値を認めている。

そのように、資本主義では、形あるものみな広報へと消えていくのであり、後期資本主義は少なくとも市場原理の導入と同程度に、この広報的生産の偏在化という傾向によって特徴づけられる。

資本主義リアリズムにおける「リアリズム」を理解するための一つの観点は、大文字の他者をもう信じないという主張にある。大文字の他者：あらゆる社会的分野が前提とする集団的なフィクション、または象徴的な構造のこと

ブランディングや広報によって引き起こされる「実体なき変容」が資本主義においてきわめて重要な役割を果たし。このことは、効率的に機能する上では、資本主義の強欲さは、むしろ様々な形で牙を隠さなければならないことを意味する

「この道しかない」という発想、「闇雲にではなく、賢く働け」という勧告はいずれも、資本主義リアリズムがいかにポスト・フォーディズムにおける労働問題の議論を基調づけているかを示している。

第七章　夢作業および記憶障害としての資本主義リアリズム

資本主義リアリズムは、限りなく変幻自在でいかなる瞬間にもその姿を変えることができる現実に服従するよう、私たちに要求する
官僚主義的権力から受けた指令にシニカルに従う能力を身に着けている者は、資本主義の絶えざる不安定さの中で健康を保ち得る唯一の方法といえる
つまり、監査手続きという課題から内面的に身を引くことによって、労働者は無意味で屈辱的な労働を続けられる。

後期資本主義の、リアリティやアイデンティティがまるでソフトウェアのように更新されていく状況において記憶障害が文化的懸念の焦点になってきた
深刻な社会・経済的不安の結果として、理論的に純粋な前向性記憶喪失があげられる。新たな記憶をつくることができないことがポストモダンの膠着状態を一言で要約できる表現である。

もし、記憶障害が資本主義リアリズムの異常を表す説得力のある例えだとするのなら、夢作業は、その仕組みの滑らかさを表すモデルになるといえる。

第八章　「中央電話局というものはない」

新自由主義と新保守主義の双方から非難を受けているにも関わらず、過保護国家という概念は依然として資本主義リアリズムにつきまとう。
大きな政府という亡霊は、資本主義リアリズムにおいて必須のリビドー的機能を果たす。それはまさに、中央集権的な権力として作動することの失敗について責め立てられるために存在する。

今や、人々は消費者として呼びかけ＝審問されているにも関わらず、市民のようにしか自分たちを想像することができない
資本主義における中心は不在である。

→後期資本主義における消費者として、私たちはますます2つの異なる現実に存在するようになる

1. なんの障害もなくサービスが提供されている現実
2. 正気を失うようなカフカの迷宮。すなわち、何かが起こることが奇跡に思われる世界。

コールセンター：後期資本主義の政治的現象学を凝縮したものである。つまり、中心不在の抽象的かつ断片化されたシステム

個人の倫理的責務がかつてないほど強く訴えられる現在。私たちは、資本主義構造の最も包括的な側面こそを問題化しなければならない。
資本主義に陰謀は確かに存在するが、問題なのは、陰謀はその働きをより深いレベルの構造によって支えられることで初めて可能になる。

第九章　マルクス主義のスーパーナニー

筆者がここで問題としているのは、
従来の子育てが基本的に拒否していた欲望と利害の同一化を、後期資本主義は強く要求するとともに、それに依存していること
「父性的」な概念である義務が、楽しめという「母性的」な責務のもとに包摂された文化においては、親が子供たちの楽しみへの絶対的権利を妨害するなら、むしろ親としての義務を果たせていないとみなされるだろう。
→私たちは、いかにして人々に挑戦や教育の場を与えようとしないことで生まれた、この単調で瀕死状態に陥った順応文化を乗り越えていくことができるのか

マルクス主義のスーパーナニー：私たちに制約を設け、私たち自らが認識できないときにも私たちの利害に沿って、行動するのみならず、それと同時に、奇妙なモノや、それを求める私たちの欲求にかけていくためにリスクを背負う覚悟のある者
資本主義の「リスク社会」において、このようなリスクを背負う傾向が、重苦しい中央集権的な社会的合意の戦後文化よりもはるかに弱くなっている。

パブリックが消費者によってその座を奪われてしまった現在、革新ではなく、必然的に停滞と保守主義がもたらされている。
後期資本主義において、顕著な情動とは、不安とシニシズムである。こうした感情は同調、そして「最小限の変化」の礼賛を育み、すでにあるものに酷似したものを作り出す。

資本主義リアリズムの世界観である「方法論的個人主義」は、公共のような諸概念を「亡霊」、つまり中身の欠いた実体のない抽象概念とみなしている
その世界観の失敗はいたるところで出ている　… 発砲事件、崩壊状況にある社会圏

今こそ、これら問題が孤立したものではなく、体系的な原因（資本）によるものだと認識しなければならない。私たちは、初心を貫き、存在論的にも、地理学的にも偏在化している資本に対して、戦略をたてなければならない。